

Jalan Jalan インドネシア

第63回「米軍上陸地点に近い海岸にある第二次世界大戦慰霊碑」

西洞窟のある高台から海岸へ向かって急な坂道を下りて海岸沿いの舗装道路を一路東へ進んだヌンフォル県のパライ村海岸に沿った場所に大きな広場があり、その奥まったところに「第二次世界大戦慰霊碑」が建立されている。

1994年3月24日に竣工された慰霊碑は現地の要望で「太平洋戦争」ではなく「第二次世界大戦」となったといわれている。日本の厚生労働省が建立に関わった各戦地に建立された慰霊碑のひとつだが、インドネシアではビアクのこの場所が唯一とされている。

「戦争がもたらした全ての結果とその悲惨さを再び繰り返さないよう全人類に想起させる為のモニュメントである」と碑文にある。

慰霊碑の脇の丘にはかつて洞窟があり、その中に多くの日本兵の遺骨が残されている、と周辺の住民が言い伝えとして聞いているというが、今では洞窟は崩壊して土砂の中に埋もれており、その真相は不明だ。

慰霊碑の後ろは納骨堂となっており、集められて祖国の帰還を待つ遺骨が納められている。慰霊に現地を訪れた慰霊団や戦友会の人たちによるとみられる日本兵の写真、卒塔婆、千羽鶴などが遺骨とともに安置されて静かに時を刻んでいる。



空港近くのホテルにある慰霊のための観音像（左）
観音像の碑文（上）

周辺の住民の中には「こんなものがあった」と日本兵の認識票をみせてくれる人もいる。認識票であるからには個人名はなくても所属部隊と番号があるので個人の特定が可能と想像できるが、困難なのが実状だ。

なぜか、ビアク島に展開していた日本軍の部隊は米軍の猛攻の前に玉砕を覚悟し、関連する書類を全て焼却したとされ、その中に認識票の番号と個人を結ぶ手掛かりとなる書類も含まれ共に灰となってしまったというのだ。日本にもそういった記録が残されていない、と聞いた。

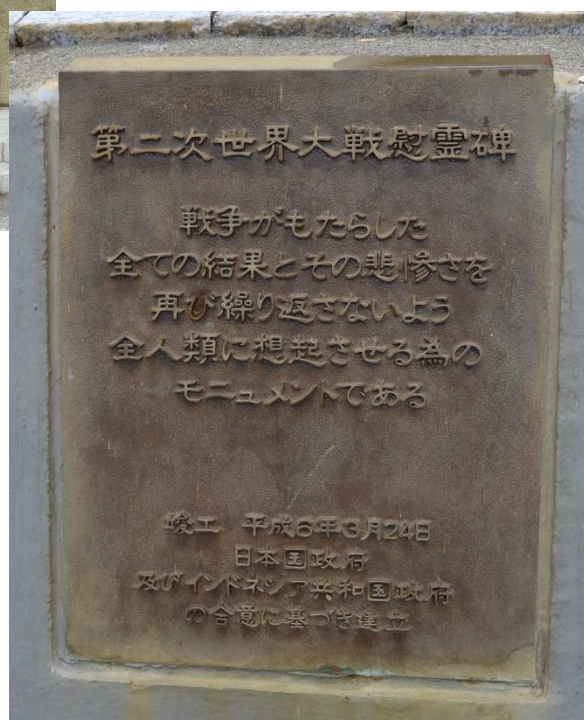
かくして持ち主が不明となった認識票は現地のパプアの人の手で大切に保管され、たまに現地を訪れる日本人に当時を思い出させる遺留品となっているのだ。

慰霊碑広場の前の海岸は遠浅にみえる静かな砂浜で、左手、東側に海岸線をたどればそこは1945年5月27日に沖からの艦砲射撃の援護を受けて米軍が大挙上陸したボスネック海岸につながっている。



第二次世界大戦慰霊碑（上）

第二次世界大戦慰霊碑の碑文（右）



ビアク島の空の玄関口となる「フランス・カイシエポ空港」からほど近い海岸にある「アエロウィサタ・ホテル」はビアク島では数少ない設備の整った宿泊施設で多くの日本人を含めた外国人観光客、日本からの慰霊団、インドネシア政府関係者、軍や警察関係者が泊まり、ホールではイベントや会合が開かれる。

このホテルの前庭に小さな観音像があり、碑文に「永遠の平和を、永遠の友情を 1980年2月8日 第3次ビアク支隊戦没者慰霊団建之」とあることからこの地で戦死あるいは病死した日本兵などの慰霊と鎮魂のための像であることがわかる。背面には「お父さん、あなた、息子よ、兄弟よ、そして友よ、われらまた参りました。ご遺志を体し日々世界の平和を希いながらがんばっております。どうぞ安らかにやすみ下さい。合掌」と刻まれている。

ビアク島には組織的な日本軍の抵抗が終焉した後もジャングルを彷徨しながら息絶えた日本兵も多く、各地の洞窟、岩陰などから未だに遺骨が発見される。日本とインドネシア両政府による一刻も早い遺骨収集事業の再開が望まれる。



地元の人が見つけて保管している
日本兵の認識票（左上）
慰霊碑内部の納骨堂（上）

慰霊碑の前の海岸から東方、
米軍上陸地点の方角を望む（左）